

生きづらさ を抱える若者の2事例

- 若者自立塾 Y - M A C の若年無業者就労自立支援への取組みを通して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
金 志明

問題意識と目的

「働いていない労働力」を社会に繋ごうと、若年無業者就労自立支援を目的とする「若者自立塾」事業を厚労省が打ち出し、各地で始動して早2年半。依然国は若者の実態像を把握できないままに当初予想もされなかった若者たちの深い困難を、丸々現場支援者たちの手に委ねているといえる。本稿は、筆者が勤務する『若者自立塾 Y - M A C よこはまアプレンティスシップセンター』における2名の塾生の『語り』を中心に、「若者自立塾」を訪れる若者らが、社会に繋がるためにどのような困難や葛藤を抱え、またどのように自身の「生きづらさ」を生きているのかを明らかにすることを目的とする。そして、それらの若者をいかにして支援するか、という現場での実践例を通じ、「若者自立塾」の現況の取組みと今後の課題についても考察するものである。

結果と考察

発達障害状態が見立てられる若者への就労自立支援の実践と課題

一人目の語りからは、軽度発達障害状態にあることが原因で、何度も仕事に就いてみたものの、いくら頑張っても仕事をうまくこなすことができず、自己否定感から深い絶望に陥っている若者の姿が明らかになった。若者自立塾 Y - M A C には、適切な療育や支援の目をすり抜けて成人するに至った発達障害者が多く存在する。考察では、こうした若者に対し、生活行動の基本的な支援から取り組んでいる支援現場の実状をあげ、「就労支援以前の支援」を必要としている若者の存在を明らかにした。

性的マイノリティである若者への就労自立支援の実践と課題

二人目の語りからは、同性愛指向者であることから、世間からの偏見や差別的なまなざしを自身の中に取り込み、今も性的マイノリティである自己存在に否定感や葛藤を抱えている若者の姿が明らかになった。考察では、まずこうした若者をありのまま受け止める Y - M A C の「場」の力を明らかにする。そして心理面と行動面への援助実践と共に、彼らと社会の架け橋となるために必要な、支援者らの援助姿勢についても言及した。

結論とまとめ

社会に繋がれない若者は、様々な要因から自らも「ありのままの自分」を否定せざるを得ない状況に追い込まれている。「若者自立塾」は社会と若者の間に立ち、彼らが安心して自身の課題と向き合い、生きていくための根底のエネルギーとなる「自己肯定感」を築き上げる「場」を提供するものである。支援者は、彼らの「生きづらさ」を丸ごと受け止め、時には社会と闘う覚悟がなければ、彼らに寄り添った本当の支援はなし得ない。

今後の課題として、本論で明らかになった様なより困難なケースに対応するためにも、福祉、行政、医療、専門的心理援助機関などが連携し、チームワークの下に一体となって支援する体制を早急に整えなければならない。そのためにも、「若者自立塾」の現状を広く社会に訴え、「ニート」という枠を超えた新たな取組みとして再出発する必要性を示唆した。